

## 第3章 文化的景観の現状と課題

### 1 重要文化的景観選定後の観光振興

#### (1) 「葛飾柴又」重要文化的景観イベント実行委員会

##### 【実行委員会の設立】

葛飾区では、重要文化的景観選定後、葛飾柴又の魅力を紹介・PRするガイドマップやパンフレット、動画を制作すると共に、「葛飾柴又」重要文化的景観イベント実行委員会（以下「実行委員会」という。）を組織し、観光誘客に向けたイベント開催に取り組んでいる。

実行委員会は、一般社団法人葛飾区観光協会、NPO法人柴又まちなみ協議会、柴又自治会、神明会、一般社団法人葛飾区観光協会柴又支部、帝釈天題経寺、葛飾区から構成され、区観光課が事務局を担っている。重要文化的景観を地区内外に広くPRすると共に、柴又地域の住民に新たな気付きの機会を提供し、まちへの誇りを醸成し、景観保全の気運を高め、次世代に担い手を育むために設立された組織である。

帝釈天題経寺参道の振興のために関係団体の協力体制が築けたことは、重要文化的景観選定の効果の一つである。

##### 【実行委員会の取組】

実行委員会のこれまでの主な取組は以下のとおりである。

#### ● 平成30年度：「葛飾柴又」重要文化的景観イベント2019

令和元年3月4日(月)～10日(日)

- ・ 葛飾柴又今昔物語：柴又の昔の写真をまちなかに展示
- ・ ライトアップ：帝釈天題経寺諸堂を照らして、かつての宵庚申の賑わいを演出

令和元年3月9日(土)～10日(日)

- ・ 柴又まち巡りスタンプラリー：スタンプを集めて柴又名物を試食

- ・ プロジェクションマッピング：柴又の歴史と文化をイメージした映像を帝釈天題経寺本堂に投映（図1）

#### ● 令和元年度：新型コロナウイルス感染症拡大のため中止

#### ● 令和2年度：国重要文化的景観の魅力発見～葛飾柴又のんびり散歩～

#### ● 令和3年3月8日(月)～21日(日)

- ・ 葛飾柴又AR謎解きラリー



図1 プロジェクションマッピング

・ 葛飾柴又今昔写真展

平成 30 年度には 4 万 8 千人の来場があった。令和 2 年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けた柴又観光回復の一助とするべく、予防対策に万全を期して開催した。AR を活用して幅広い層が 3 つのリングを柴又の歴史や文化について学びながら、楽しく回遊でき、コロナ禍でも安全に柴又散策を満喫できることをアピールし、「新たな生活様式」における観光への提案ともなった。



図 2 3 月 9・10 日の記念イベント 実行委員会を中心に地元と行政の協働によって実施された。

コラム 葛飾柴又 AR 謎解きラリー

コロナ禍に行われた AR 謎解きラリーの案内役は、縁起物の郷土玩具「弾き猿」の猿である。参加者は、スマートフォンとマップを手にまちを観察し、柴又の歴史や文化を猿のキャラクターに教わりながら歩いた。同時に「葛飾柴又今昔写真展」が地域の店舗等の協力の下行われ、地域住民との接点も設けられた。

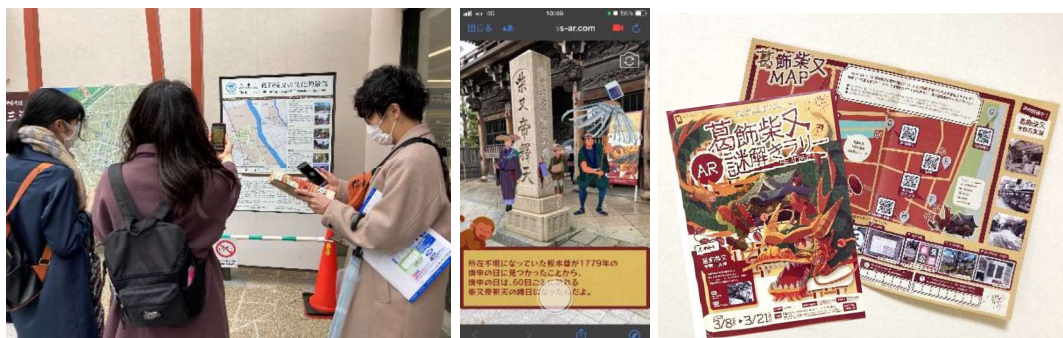


図 3 若者も多く参加／指定された物にスマホをかざすと AR が出現／マップ

(2) ユニークベニュー

令和元年 10 月には、帝釈天題経寺とその参道を会場として「Tokyo ユニークベニューショーケースイベント 2019～TOKYO GO Local～」が開催された。東京都は M I C E 誘致の一環として平成 26 年度よりユニークベニューの普及に取り組んでおり、公益財団法人東京観光財団に委託して東京のユニークベニュー



図 4 Tokyo ユニークベニューショーケースイベント

一施設を開発し、ホームページ「TOKYO UNIQUE VENUES」で紹介している。帝釈天題経寺参道は「柴又帝釈天門前参道商店街神明会」として掲載され、また題経寺（柴又帝釈天）がこれに登録されている。

前述のショーケースイベントは、事例紹介による取組の推進を目的としたものであり、公益財団法人東京観光財団が主導し、葛飾区観光課が帝釈天題経寺参道と帝釈天題経寺の調整役となり、令和元年10月10日に主催者代表である東京都知事の参加の下、各国大使館等を招待して開催された。

重要文化的景観選定後、地元柴又の方との協働によるイベントの開催や、ユニークベニューとしての活用による新たな来訪者層への訴求等、葛飾柴又の歴史的・文化的遺産を資源として観光振興に繋げる文化観光の取組を今後とも進めていく。

## 2 整備活用の目標像

### —「葛飾柴又らしさ」の発展的継承に向けて—

#### (1) 10年後の目標像

重要文化的景観選定後、帝釈天題経寺参道を中心として、寅さんの故郷としての下町情緒を残したまち並みの保全が図られると共に、さらなる魅力を生み出すためのイベントが開催されているところである。このような官民協働の取組をさらに促進するため、本節では、第2章に記載した「葛飾柴又らしさ」の発展的継承に関し、本計画の計画期間10年における目標像を記す。

#### 回遊のネットワークの発展

葛飾柴又では、柴又駅を玄関口とし、帝釈天題経寺の二天門に至る参道が賑わいの中核となっている。一方、この道だけが帝釈天題経寺の「参道」という誤解も招きがちである。

葛飾柴又では、古くは江戸川渡河地点が玄関口の一つとされ、国分道を含む水戸街道や佐倉街道の脇道が帝釈道と呼ばれる信仰の道とされ、玄関口や参道は必ずしも一つではなかった。新柴又駅のように近年に増えた玄関口もある。

よって、現在の参道にさらなる賑わいをもたらし、その活況を他の沿道とも共有できるよう、荒たな玄関口（例：堤防への上り口、新柴又駅等）を設定し、第2、第3の参道を位置付け、回遊のネットワークを発展させる。

## 歴史的な中核の回復

葛飾柴又においては、京成電鉄の線路によって柴又八幡神社が孤立し、江戸川堤防の拡大によってまちと川が隔てられ、柴又街道（昭和22年戦災復興院告示）が国分道や帝釈天題経寺参道、柴又用水跡を分断し、北総線の線路で中通りが途切れて医王寺が孤立する等、これまでの開発の中で、歴史の流れや文化の文脈が見えにくくなってしまった所もある。

よって、文化的景観を理解する上で重要な、歴史的・文化的な中核となる場所については、現代的なデザイン手法も含めながら、その位置付けの回復を図る。

また、柴又街道の拡幅により、現在の歴史的中核となっている参道交差点が、その特徴及び特質を損なうような変化が及ばないよう検討する。

## 文化リテラシーの向上

文化的景観は、その中から自然や歴史、文化と現代生活との関連性を的確に読み取り、地域全体を見渡しながらその大切さを理解し、次の時代へと応用、活用できる人々がいることで、成り立つものである。このような「文化リテラシー」とも呼べる能力こそが、歴史と文化を活かした地域づくりの持続を支えるものであり、地域全体で高めていく必要がある。そのためには、以下のような現況に目を向け、柴又街道拡幅の機会等を捉えて関係者に協力を働きかけ、わかりやすさや伝わりやすさの創出を図る必要がある。

- 国分道に関しては、柴又八幡神社—国分道（北）—真勝院—帝釈天題経寺—川甚—矢切の渡しを結ぶ国分道（北）の沿道景観が歴史的に重要な道であると感じさせるものとはなっていない。また、国分道（南）については歴史的に重要な道であることの認識が十分ではなく、このことが中通りの位置付けをもわかりにくくしている。
- 柴又街道に関しては、通過する車に対し、柴又用水跡や帝釈天題経寺参道の存在を伝える状況とはなっていない。また、国分道との交差点、帝釈天題経寺参道との交差点が近接し、信号待ちの車両が帝釈天題経寺参



図5 国分道（南側ルート）  
江戸川土手を正面に、左手は山本亭、右手方向に進むと葛飾柴又寅さん記念館に至る大切な回遊ルートを形成している。



道を繋ぐ横断歩道上に止まって参道を分断する状況が見受けられる。加えて、新柴又駅から柴又用水跡、帝釈天題経寺参道、国分道、良観寺、金町浄水場等を繋ぐ道でありながら、これらへ誘う案内が不足し、歴史を感じながら快適に散策できる状況には至っておらず、かつ柴又用水跡については、安全で緑豊かな散策路ではあるが、灌漑施設としての由来を十分に感じさせる状況ではない。

- 葛飾柴又で農業を営んできた旧家の屋敷及び屋敷地や農地が減じ、かつ土地の細分化による住宅地開発が進んでいるため、農村由来であることの雰囲気は伝わりにくくなっている。

上記に加えて、大切な場所には案内板や解説板を付し、古写真や古絵図等のアーカイブとのリンクを作る等、地域の人々にとっても来訪者にとっても、わかりやすく散策できる仕掛けを充実させていく。

文化リテラシーの向上は、わかりにくさや伝わりにくさを新たに生み出さない努力を含むものである。

## (2) 「葛飾柴又らしさ」の発展的継承に向けての課題

以下、本節では、目標像に向けた課題の整理を行い、比較的規模の大きなハード整備を伴うという視点に基づき、優先的に着手する必要性が高いものから順に並べた。仕組みや体制の整備、普及啓発という点からは、いずれも等しく大切で、恒常的に取り組む必要がある。

### 課題1 重要な構成要素を継承するための取組

#### 【所有者等の支援】

重要な構成要素の中には、街区、道路、建築、工作物、自然部等様々なものが含まれる。時代も古代からあったと思われる道から現代の建築まで含まれ、建築も木造からRC造まで多彩である。

そのため、一つ一つについて、保存計画における個票の充実等を通して、その特徴や特性をわかりやすく伝えると共に、所有者等が行う修理や修景、整備や防災の取組等に対し、相談窓口を設けたり、補助事業を創設したりする等して支援を行う。

#### 【指定等の推進】

帝釈天題経寺境内の建造物や庭や景木（瑞龍のマツ）には、区や都の文化財や歴史的建造物に指定されているものがある。重要な構成要素の中でも特に文化財的価値が高いものについては、文化財保護法の登録制度や、区文化財保護条例の指定制度等を活用し、保護の充実を図る。

### 【歴史的・文化的脈絡に即した参道景観の発展】

参道沿いの敷地遣いや建築の特徴については、神明会やNPO法人柴又まちなみ協議会等と協力し、その一層の把握に努めると共に、参道沿いの環境上、防災上、景観上等の諸課題を把握しながら、これらを同時に解決できる手法の開発と実施に努める。併せて、「柴又まちなみ景観ガイドライン」の運用や充実を支援する。

#### コラム 「ただいま」、「おかえり」が飛び交う参道

放課後になると、帝釈天の参道には「ただいま〜！」と元気な小学生の声が響く。これも、1階の店先を広く開放して対面販売を行っている、ここならではの光景である。自動ドアやショーウィンドウを構えた店舗やマンションでは生み出せない、地域の人々の交流が日々育まれている。



図6 参道を帰宅路とする小学生



図7 商品を作りながら参道に目配りも

## 課題2 地域住民の文化的景観の理解と地域内外への周知

### 【普及啓発】

本章第1節に紹介する実行委員会等、関係団体との協力の下、普及啓発事業の実施に努める。

また、ユニークベニューを始めとする民間による普及啓発の取組を支援する。

### 【伝統文化等の継承と発展】

葛飾柴又の地域社会を支えてきたのは、伝統的な祭礼や行事等を介した人と人との繋がりである。柴又八幡神社の神獅子、帝釈天題経寺の庚申行事や纏の奉納等、葛飾柴又固有の伝統文化については記録をとると共に、広くPRを行い参加の機会を設けて、これを担う人、支える人を育てる。

また、食や住の文化については、中高年層にヒアリングを行う等して様々な記憶を掘り起こし、若い世代と共有しつつ、そこから創造される新たな文化的取組を支援する。その際、かつての農家の暮らし等にも着目する。



図8 節分会

### 【回遊ネットワークの整備】

本章第2節で目標像として掲げる回遊ネットワークの整備に努める。その際、次のものを優先路線として位置付ける。

- 国分道（北）、国分道（南）及び帝釈道
- 中通り
- 柴又用水跡
- 柴又街道
- 堤防上の道路

また、重要な構成要素、重要な交差点等を含め、大切な場所に案内板や標識等を整備する。

柴又街道の拡幅への対応については、以下に課題3として記述する。

#### コラム 木々が繋ぐ歴史の散歩道

葛飾柴又は、木々をたどって歩けば、かつて農村であった歴史に触れることができる。古くからの道では、歩を進めるごとに生垣や樹木が現れる。旧家に由来する樹木が多く残り、スダジイのほか、クスノキ、イチヨウ、ケヤキ、クロマツ等変化に富んでいる。また、柴又用水跡は、両側の敷地の庭木も含めて、緑豊かな空間が形作られている。



図9 旧家の敷地内にも多くの樹種が見られる



図10 柴又用水跡の緑

### 課題3 柴又街道の拡幅整備事業の機会を捉えた景観整備

#### 【回遊ネットワーク上の位置付け】

柴又街道の拡幅は、新柴又駅と参道、ひいては金町浄水場との繋がりを強める好機と捉え、次のことに留意する必要がある。

- 徒歩による快適な散策路の創出
- 堤防上からの低層の家並みが広がる眺望を遮らない良好な景観形成
- 柴又街道と交差する柴又用水跡や帝釈天題経寺参道、国分道へのわかりやすい誘い



### 【帝釈天題経寺参道との交差点の整備】

柴又街道の拡幅による帝釈天題経寺参道の分断感は、道路幅員によるものだけではなく、車両の通行によるものも要因となる。

参道としての一体感や特徴の維持を図るためには、次のようなことを検討する必要がある。

- 参道のイメージを歩道に表しながら、柴又街道全体としてデザインの連続性があり、安全で快適に歩ける歩道空間の確保
- 参道や柴又用水跡との交差点付近における景観への配慮について、関係機関と協議する。

参道のイメージを歩道に表すに当たり、交差点に面して建つ既存の重要な構成要素を基調とした整備を図ることは、殊更に重要である。これに改変が施される場合には、保存計画及び「柴又まちなみ景観ガイドライン」を踏まえると共に、製造と販売の一体性、店先での来訪者との交流といった特性の保持に目を向け、神明会やNPO法人柴又まちなみ協議会等、従来からまち並み保全に努めてきた団体の意見が十分に尊重されることが求められる。

舗装やストリートファニチャー等、現代的なデザイン手法によって連続性を演出し、分断を和らげる工夫を施すことも一考であるが、そのデザインプロセスにも帝釈天題経寺参道に日々関わる人々の意見が十分に反映されることが大切である。



図 11 帝釈天題経寺側から見た帝釈天参道交差点



図 12 帝釈天参道交差点付近にはバス停があり重要な交通拠点でもある。



図 13 参道入口から帝釈天参道交差点方向への眺め



## 課題4 生業（商業・農業・観光等）の活性化

生業の活性化においては、関係課との協力の下、商業、農業、観光等のそれぞれに関し、必要な支援に取り組む必要があるが、文化的景観の視点からは、伝統的には縁日と屋台、近年においては前述の実行委員会の取組や、参道におけるユニークベニューの開催のように、歴史的な場所（社寺境内、道等）、伝統的な活動（祭礼、年中行事等）、特産品（川魚料理、草だんご、煎餅、佃煮等）、観光等が相関性を持つような催しの促進に重点を置く。まち巡りや河川敷でのスポーツやレクリエーションと食体験や体験型の事業を合わせることもその一例である。



図14 和菓子作り体験

このようなイベントにあっては、参道店舗や旧家等が発する「葛飾柴又らしさ」をPRすると共に、平成元年の「柴又ルネサンス元年」や、令和2年度の「国重要文化的景観の魅力発見～葛飾柴又のんびり散歩～」のように、地域の課題、社会の問題に対応する中で発揮される創発性を尊重し、支援できるような体制を整えると共に、これに寄り添うような区の取組の展開を図る。

## 課題5 地域の災害レジリエンスの向上・強化 課題6 農業景観の保全

### 【地域の災害レジリエンスとは】

レジリエンスとは、逆境や困難から自律的に立ち直る力を指す言葉であり、地域の災害レジリエンスとは、予防、災害時対応、災害後の復旧等を包括的に含んでいる。また、地域の災害リスクに対する情報を共有しながら、「壊れない」という発想に加えて「壊れにくい場所を確保する」、「壊れても命が守られる」、「壊れても直しやすい」、「直している過程でも一定水準の生活を確保できる」といった中間的な考えを含め、その方法にも、既存のものを上手に用いる（井戸、水路等）、既存のリスクを個々人の意識向上と協力によって減じる（タ



図15 文化財防火デーの様子  
毎年1月に帝釈天題経寺境内でバケツリレーや防火訓練が実施されている。

コ足配線、ブロック塀等) といった取組を含めながら、地域全体を災害に対して強くするという考えを含む言葉である。

### 【葛飾柴又における災害レジリエンスのヒント】

例えば、葛飾柴又の第2のリング、第3のリングに広がる住宅地に一定の農地を確保することにより、延焼防止帯の確保、安全な避難路の確保、緑被率の増加、美しいまち並みの形成、歴史文化の継承といった多面的な効果を期待することができる。危険なブロック塀を生垣に変えることも同様である。神社に多く見られるイチヨウや、生垣に多用されているイヌマキは、防火効果を持つ樹木である。イチイ、ネズミモチ、アジサイ等も同様である。



図16 水害に備え、敷地をかさ上げた江戸川土手沿いの旧家

災害時に備えて、葛飾区でも一定量の飲料水や保存食を備え、各家庭でもその努力がなされているところであるが、井戸により飲料水が確保され、川や農地による食料自給がなされていることは、避難生活上の生命と健康の維持における安心にもつながる。

### 【葛飾柴又の災害レジリエンスの向上・強化】

下総台地と東京低地の間、川が流路を変える中で形成された地形が歴史を生み出してきた葛飾柴又においては、市街地が発展する経緯、生活の変遷の中に防災に対する多くのヒントが隠されている。文化的景観という視点からこれらのことを読み解き、共有し、重要な構成要素等に期待できる防災上の効果等を検証しながら、歴史的・文化的な景観の維持と創出が、地域の災害レジリエンスの向上・強化に繋がるような整備を図る。

### 【農業景観の保全】

とりわけ、かつての農村風景の中に備わっていた様々な水害や火災、地震等への知恵を再認識し、地域における農地や旧家の重要性に対する意識や理解を高め、多面的に地域づくりに資する農業景観の保全を図る。また、この取組を通じて都市内農地の継承を図るための人づくり、体制づくりに取り組む。



図17 農地は、都市においては防災上重要なオープンスペースとされる。

## 課題7 江戸川堤防からの景観の保全

### 【文化的景観を活かした地域づくりの指標】

青空が広く見えるまち、澄んだ空気、土手からの葎の景色、子ども達に「おかえり」と声をかけてくれる参道の人々。葛飾柴又に望まれているのはこのような地域の姿である。

第1のリング、第2のリング、第3のリングは、江戸川堤防から見える景観の中で繋がっており、ここからの眺望は、文化的景観を活かした地域づくりが良好に進んでいるかどうかの指標ともいえるものである。

### 【流域への協力の働きかけ】

川の水質や動植物の生息環境、対岸の景色等は、葛飾区や区民の努力だけでは成し得ないものである。また、親水環境の向上を図り、土手や川を介した周辺地域との関係性を発達させていくことは、葛飾柴又の地域づくりを盛り上げていくことにも繋がる。

こうした地域外交に取り組んでいくに当たり、江戸川堤防からの眺望の美しさは、「葛飾柴又の文化的景観」の保存と活用の取組を象徴するものとなる。

### 【文化的景観の評価】

よって、定点を定めて定期的に江戸川堤防からの眺望の移り変わりを写真観測して公開を図ると共に、重要な構成要素の保全状況、地域経済の動向、アンケート等により、文化的景観の取組を総合的に評価し、その課題を次に繋げていくための仕組みづくりを行う必要がある。

併せて、新八水路や矢切の渡しのように、近年ではその歴史的意義に対する関心が薄らいでしまったもののPRや整備に努め、これらを回遊ネットワークの中に取り入れる等、葛飾柴又の成長における川の重要性と可能性に対する多様な気付きへと繋げていく。



図18 江戸川土手からの河川敷、江戸川、対岸の下総台地の眺め

## 課題8 文化的景観を継承するための体制の充実

### 【文化的景観制度の社会的意義】

文化的景観は文化財であると共に、地域づくりのゆるやかな枠組みともなるものである。

歴史の中で、築堤や鉄道の敷設が市街地の発展に大きな影響を与えてきたように、都市インフラの整備は、経済の優先性を変え、それに伴う建物の建て替えを招き、住民の社会増・社会減を招き、景観を変える。



そこに住民が主体的に関わり自ら目指す方向に変化を誘導できるのか、成り行きに任せてそれに自らを合わせていくのかは、大きな違いである。文化的景観は前者を願う住民の意思に応える制度である。

今後、様々な社会経済の変化が起こり得る中で、文化的景観は、異なる世代の住民や新旧の住民が合意形成や意思決定を行う際の方向性を示すものとして共有される必要がある。

#### 【変化を許容するために】

都市域の文化的景観は、ある程度の現状変更を保護の中に含むものであるが、その方向性が地域住民を始めとする関係者によって共有され、現状変更後の状態に対して予め合意が形成されると共に、後世の人々の理解と共感を得られる考え方が示されることが求められる。

変化は、特定の者だけが利益を享受するのではなく、地域全体で享受できることが許容の要件となり、それが確認できる手続きと体制が整えられ、その経験が地域に蓄積されることが求められる。

このような視点から、既存の体制や仕組み、計画や基準を関係者と共に見直し、充実を図る必要がある。その一環として、「葛飾柴又の文化的景観」の中で行われる公共事業等においては、地元の総意に十分な配慮が払われるよう、また、文化的景観としての価値が損なわれることのないよう、有識者等へ意見を求め、関係機関との調整を図り、関係部課間での連携協力を図るための葛飾区庁内における仕組みや体制の充実を図る。

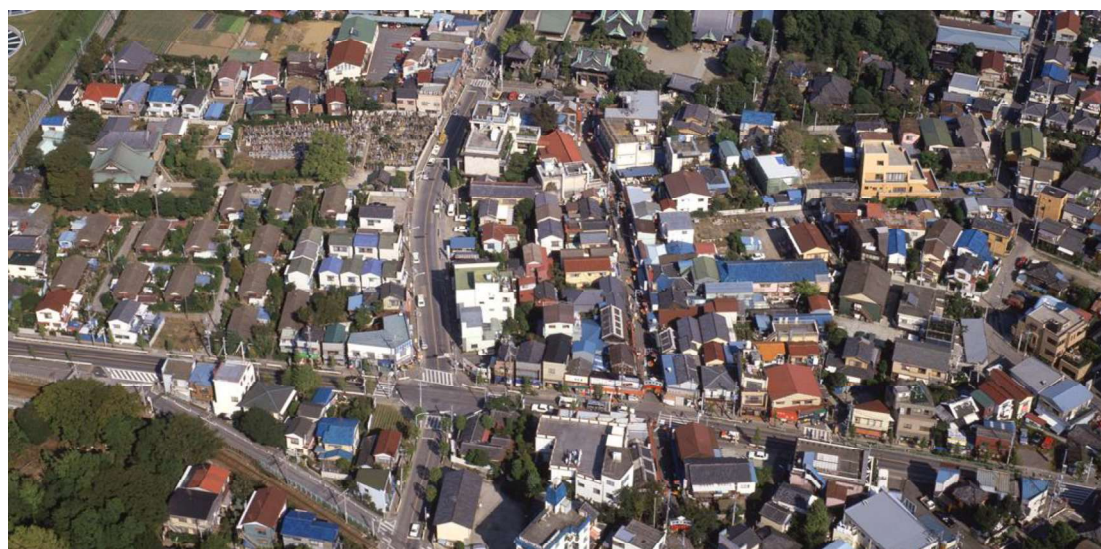


図 19 昭和 59 年撮影の参道周辺の航空写真

縦に走る道路が国分道、横に走る道路が柴又街道、右上が帝釈天題経寺、左下の茂みが柴又の鎮守八幡神社